

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH

CENTER NEWS No. 156 March 2019

研究の最前線

◆ スラブ・ユーラシア研究センター 2018 年度冬期国際シンポジウム「帝国・
ブロック・連邦にそびえる言語 1918-2018」開催 ◆

12月13日・14日に標記の国際シンポジウムが開催されました。2018年は東欧諸国にとって記念すべき年で、チェコスロバキア第一共和国、ポーランド独立回復、セルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国（いわゆる「第一のユーゴスラビア」）建国からちょうど100年にあたります。これらの国々は、第二次世界大戦の後に社会主義を経験し、20世紀末にはいわゆる東欧革命によって民主化が進みました。共通点は多いものの、その過程は決して一様ではなく、場合によっては戦争を経験するなど、大変劇的な一世紀であったと言えます。



シンポジウムの参加者

いうまでもなく、このような社会変化は現地の人々に多様な影響を与え続けてきたわけですが、本シンポジウムでは、その影響が表れる領域の一つとして、これらの国々で話されている言語に注目し、社会変化がもたらした言語状況の変化、言語構造そのものの変化を分析する研究報告が行われました。共通論題として「言語政策と言語計画」、「言語パターンの多様化」、「言語接触と言語変化」の三点が取り上げられました。参加者はヨーロッパ、北アメリカ、日本で活躍する世界トップクラスの研究者で、言語がトピックであり、社会言語学が主要な枠組みではありますが、言語学者だけではなく、歴史学者、社会学者、政治学者、文



スニェジャナ・コルディッチ氏による基調講演の様子

シヨナリズムの動態：旧ユーゴスラビアと旧ソ連の場合」と題した講演会も行いました。こちらはシンポジウムの登壇者のうちスニェジャナ・コルディッチ氏（フリーランス）とミハエル・モーザー氏（ウイーン大学）を中心に大変熱のこもった議論が交わされました。

この場をお借りして協力してくださった関係者の方々に深くお礼を申し上げます。複数の参加者から「内容、ロジの両面において、このように完璧に組織されたシンポジウムは初めてだ」と称賛を受けました。なお、「身内」ではありませんが、この高い評価は、特にセンターの高橋沙奈美氏と油本真理氏のご尽力によることに疑いはありません。お二人に改めてお礼申し上げます。[野町]



討論の様子

◆ 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」／◆
北東アジア学会連携シンポジウム「北東アジアの鳴動：
朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」開催

2019年1月26-27日にかけて、富山大学経済学部においてシンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」が開催されました。この企画は、人間文化研究機構機関研究プロジェクト「北東アジア地域研究」の三拠点（富山拠点、北大拠点、東北大拠点）と北東アジア学会の連携で行われ、二日間で延べ72名が参加しました。

第一セッション「ロシアと朝鮮半島問題」は、北朝鮮をめぐるロシアと中国の関係を中心に、周辺諸国の国際関係を議論することを目的とする学会連携企画でした。三村光弘（ERINA）は、朝鮮半島の非核化のために何が必要なのかについて分析し、北朝鮮の発展戦略の観点から米中韓口日がすべき関与について述べました。加藤美保子（北大）はロシアの公式文書の方針と過去18年間の露朝関係の実態を検討し、グローバル、地域、ローカルのレベルでロシ



セッション1あいさつ

ら議論しました。広川佐保(新潟大)は1983年に蒙政府によって中国に送り返された漢人移民を指す「蒙古帰僑」の歴史的背景と足取りについて報告しました。イゴリ・サヴェリエフ(名古屋大)は、第一次世界大戦期の労働力不足を補うために雇用された中国人契約労働者に注目し、彼らの再移動がもたらした、東洋と西洋の文化の接触

と西部ロシアへの影響について論じました。藤原克美(大阪大)は、満洲国のなかでは日本資本の進出が遅れていたハルビンの百貨店の特徴と変化を検討し、多民族社会の生活・消費スタイルを支えた百貨店の役割について説明しました。橘誠(下関市立大)は、1911年の独立宣言以降、外モンゴルにおける商業利益をめぐって蒙中露の三者が行ってきた関税交渉に注目し、モンゴル国が関税と借款により財源を確保してきたことを指摘し、南北の大国との「共生」の実態について論じました。

立山連峰を眺望できる会議室のなかで、二日間にわたって国際関係、安全保障、経済、人の移動、文化、歴史という多様な観点から北東アジアの国境地域における多民族共生の実態と可能性について有意義な議論が交わされました。

[加藤・斎藤]

◆ 2019年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧を中心とした総合的研究)」にかんする公募結果 ◆

共同利用・共同研究拠点の事業として、例年通り「プロジェクト型」の共同研究、「共同利用型」の個人による研究、センターが設定した課題による「共同研究班」の班員の募集を行いました。2018年12月15日の共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会において応募者を審査した結果、以下の方々が採択されました。[編集部]

2019年度採択者一覧

1「プロジェクト型」の共同研究

	申請者氏名 (代表者)	所属機関・職	研究課題名
1	小椋 彩	東洋大学文学部日本文学文化学科・助教	中東欧地域のエコクリティシズムに関する研究
2	久保庭眞彰	一橋大学経済研究所・名誉教授	現代ロシアの国内・国際産業連関についての総合的研究：ロシア新規大規模産業連関表の利用
3	三谷 恵子	東京大学大学院人文社会系研究科・教授	近代南スラヴ地域の法形成と法言語：『セルビア民法典(1844)』と『モンテネグロ一般財産法(1888)』の比較研究

2 「共同研究班」の班員

	申請者氏名	所属機関・職	テーマ
1	塩谷 哲史	筑波大学人文社会系・助教	①班 近現代の中央ユーラシアに関する共同研究
2	藤澤 潤	神戸大学大学院人文学研究科・特命講師	①班 近現代の中央ユーラシアに関する共同研究
3	吉村 貴之	早稲田大学イスラーム地域研究機構・招聘研究員	①班 近現代の中央ユーラシアに関する共同研究
4	古宮 路子	東京大学大学院人文社会系研究科・教授	②班 スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究
5	ヨフコバ四位 エレオノラ	富山大学・教授	③班 スラブ・ユーラシアにおける言語接触・言語圏に関する共同研究
6	上原 良子	フェリス女学院大学国際交流学部・教授	④班 スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究
7	醍醐 龍馬	小樽商科大学・准教授	④班 スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究
8	松澤 祐介	西武文理大学サービス経営学部・教授	⑤班 スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較
9	山脇 大	国際連合食糧農業機関欧州・中央アジア地域事務所・ジュニア専門官(環境・気候変動)	⑤班 スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較

3 「共同利用型」の個人による研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	井上 岳彦	大阪教育大学・特任講師	ロシア帝国とイギリス帝国の仏教徒による越境的交流に関する研究
2	梅村 博昭	元東京農業大学生物産業学部講師(現在所属なし)	レオニード・クラージンとアレクサンドル・ボグダーノフ
3	大崎 巖	政治学者、翻訳・通訳者(フリーランス)	日ロ領土問題における政治的神話に関する研究:生成過程、性格の差異、政策への反映
4	金沢 友緒	日本学術振興会・特別研究員(PD)	近代ロシアの初期語学教育と母国語の形成過程
5	金 成浩	琉球大学人文社会学部・教授	冷戦期ソ連外交の国境に対する安全保障観と隣国への軍事介入決定過程に関する比較研究
6	木村 暁	東京外国語大学・特任講師	ロシアにおける中央アジア概念の背景:18世紀の地理認識をさぐる
7	齊藤久美子	和歌山大学経済学部・教授	ロシア市場経済移行後の会計・経済・経営・金融語彙の変化と変容
8	佐伯 彩	奈良女子大学大学院博士研究員	19世紀後半、ガリツィア巡幸とハプスブルク帝国における巡幸報道の動向

9	櫻間 瑞希	筑波大学人文社会科学研究所 博士後期課程（日本学術振興 会特別研究員 DC1）	ロシア連邦の共和国によるディアスポ ラ政策：文化・言語振興政策を中心に
10	鈴木 理奈	札幌医科大学・北海学園大 学・室蘭工業大学・非常勤 講師	ロシア語における品詞分類の変遷： 数詞と名詞の関係性
11	白村 直也	岐阜大学教育推進・学生支 援機構・特任助教	刑法第 116 条の改正と女性のための 国家行動戦略 2017 - 2022 年の策定 をめぐる考察

◆ 専任・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナー等が以下のように開催されました。

11 月 16 日：仙石学「東欧の混迷と分断：EU とロシアの間で」

コメンテータ：上垣彰（西南学院大学）

提出されたペーパーは、国際問題研究所のプロジェクトの報告書に掲載予定のものという
ことで、報告者としては珍しく、内政ではなく、国際関係を扱ったものでした。内容的には、
2008 年頃からのロシアの影響力・浸透の強まりにより、東欧諸国のなかで親ロシア的な国と
反ロシア的な国との分断が生じているのではないかということについての考察でした。討論
のなかでは、このような影響力・浸透という場合の経済的ファクターと政治的・軍事的ファ
クターの関係性の問題が取り上げられ、報告者からはロシアの意図としては政治的・軍事的
ファクターの方が大きいだろうという返答がありました。東欧諸国の対ロ態度の違いが何に
よるのかについても多くの質問が出され、地政学的要因、経済的要因、対露感情といった要
因をめぐって議論がありました。経済的影響力については誰の誰に対する影響力であるのか
という問題（アクターは一枚岩ではないという問題）も提起されました。東欧諸国を 2 つの
陣営に分ける基準についても、いろいろな意見が出されるなど、活発な討論がなされました。
[田畑]

1 月 18 日：野町素己 “The Gorani People in Search of Identity: The Current
Sociolinguistic Situation Among the Gorani Community of the Former Yugoslavia”

コメンテータ：三谷恵子（東京大学）

提出されたペーパーは、昨年、報告者が共編者となって刊行したセンターの *Slavic Eurasian
Studies* (No. 34) に掲載された既発表の論文でした。ゴラー人というコソヴォ、マケドニア、
アルバニアの 3 国にまたがって住む少数民族のアイデンティティのシフトを論じたものでし
た。報告者がこれまでこのセミナーに提出してきたペーパーは、専門の言語学プロパーのも
のが多かったように思いますが、今回は、より学際的な社会言語学のものであったためか、
多くのコメントが出され、質疑が大変盛り上がったように感じました。その質疑では、上記
の 3 国におけるゴラー人の状況や言語の違い、ソ連時代における言語教育の違い、その相互
交流について、また、ゴラー人とコソヴォ紛争との関係、トルコの影響などをめぐっていろ
いろなコメント・質問が出されました。さらに、ゴラー人の言語の公式化についても、その
ための運動や海外からの支援などに関して、多くの質問が出されました。[田畑]

1月23日：田畑伸一郎 “Flow of financial resources Between the federal budget and the Arctic regions in Russia”

コメンテータ：徳永昌弘（関西大学）

今回提出されたのは、田畑氏が昨年12月のASEEESに提出したペーパーで、氏の一連の中央・地方間の財政関係研究の一部となるものでした。このペーパーでは、北極域の連邦財政への貢献は意外に大きいですが、他方で域内の地域の間では貢献度の差があること、および輸出入関連税はエネルギー輸出が影響しているが、人口の多さも作用していることが提起されました。コメンテータの徳永氏はこのペーパーに関して、公式データを利用してロシア北極地域の財政面での貢献度を定量的に示したこと、および地域別の貿易関連の税を推定して税収面における地域財政と連邦財政の関係をより精緻に検討したことを評価した上で、分析結果とロシア経済の構造的特徴に関する議論との関係、ヤマロ・ネネツ自治管区とサハリン州の相違、あるいは税金を納める企業側のデータの利用可能性などについてのコメントを提起しました。その後の質疑応答では、石油・ガスの価格変化が与える影響、財政の持続可能性と地域の持続可能性との関係、現状のフローで財政の持続可能性を論じることの意味、「北極域」というまとまりでこの議論を行うことおよび政府がこのような枠を設定することの意味、北極域の中の格差（特にヤマロ・ネネツ自治管区と他の地域の差）、ロシアの近年の北極政策の変更の理由、定住人口の定義と移民労働者との関係、極東と北極のプログラムの相違など、多岐にわたる議論が提起されました。[仙石]

2月4日：ウルフ、ディビッド “Phony War, Phony Peace: Sugihara’s Shifting Eurasian Context”

コメンテータ：小森宏美（早稲田大学）

杉原千畝の「命のビザ」の美談はよく知られていますが、この話がどのような国際政治上の文脈で可能だったのかについてはこれまで十分に考察されてきませんでした。その大きな理由の一つが、ロシア語文書の活用が困難だったことにあります。この空白を埋めるべく、ウルフ研究員は高尾千津子氏とイリヤ・アルトマン氏と共同で91の文書を集めた史料集の刊行を準備しており、今回提出されたのはその序文になる予定の原稿でした。それは、杉原の行動が1939年8月23日のモロトフ＝リッペントロップ協定（独ソ不可侵条約）と1941年4月13日のモロトフ＝松岡協定（日ソ中立条約）の狭間で可能だったこと、換言すれば、東西からの二方面攻撃を回避しようとするスターリンの戦術という背景抜きには語れないことを示すものでした。またそれは、具体的な人間の交渉や交感を材料に、ユーラシア大陸の東西で生じた大きな歴史の変動を簡明に描出した点で、ウルフ研究員ならではの読ませる文章でした。コメンテータの小森氏からは、杉原の行動に対してドイツから抗議はなかったのか、ソヴィエト化しつつあるリトアニアでのユダヤ人の状況を考える必要があるのではないかといった質問が出されました。全体の議論では、日ソ中立条約に至る両国の交渉でユダヤ人難民の日本通過の問題がどの程度当事者に意識されていたのか、ユダヤ人難民のソ連領通過に直接関与したインツェリストの意図はどのようなものだったのかなどの論点が出ました。ウルフ研究員によれば、この史料集は、「ユダヤ人」に象徴されるステレオタイプがどのように政策を動かすのかを考える際にも有益な材料を提供しているとのことでした。[長縄]

2月14日：宇山智彦「カザフ知識人とイスラーム：遊牧民社会の近代化の方向性をめぐって」

コメンテータ：秋山徹（早稲田大学）

提出されたペーパーは、『近代中央ユーラシアの眺望：研究の新展開』と題する今年出版される本に収録される論考の原稿ということでした。内容は、カザフ人が近代化とイスラーム

の関係をどのように理解し、それが民族運動の展開のなかでどう変化したかについて、当時の新聞などにおけるカザフ知識人の議論を分析することによって、考察するというものでした。カザフ人とイスラームの関係は、近代化などの課題や国家制度・政治状況との関連で可変的なものであるというメインの主張について、コメンテータを含めていろいろな意見が出されました。さらに、討論のなかでは、慣習法とシャリーア（イスラーム法）の2項対立をどうとらえるか、この時代の知識人とはどのような人々であるのか、カザフ知識人が考えたイスラームの発展モデルとはどんなものなのか等々について多くの質問やコメントが出されました。植民地近代論や当時の新聞資料についての質問も出され、非常に活発な議論になったように感じました。[田畑]

助教セミナー

11月30日：**菊田悠**「トイ（祝宴）縮小法案に見るウズベキスタンのモダニティとジェンダー」
コメンテータ：宗野ふもと（筑波大学）

提出されたペーパーは、ある報告書に収録される原稿として執筆しているものということでした。トイとは、中央アジアのムスリム社会で結婚や子供の誕生などの慶事に行われる祝宴のことで、これが非常に高額化していることから、2016年末に就任したウズベキスタンのミルジヨエフ大統領は、このトイの縮小にかなりの力を注いでおり、トイを規制する法案が2018年3月に上院を通過したということでした。それにもかかわらず、トイが縮小しない理由を考えるとというのが本論文の問題設定であり、ジェンダーの観点からその回答を考えた点に本論文の最大の特徴があるということでした。討論のなかでは、嫁の立場の弱さというジェンダーの要因以外にも、この問題の原因は考えられるのではないかと、婚資というもう1つの制度との関係で歴史的に論じるべきではないかななどの意見も出されました。扱われた問題が多くディシプリンに関わるものであったため、出席者全員から質問・コメントが出されるという稀な研究員セミナーとなりました。[田畑]

12月11日：**油本真理**「腐敗防止の国際規範とロシア：公職者の資産公開制度を事例として」
コメンテータ：松寄英也（日本学術振興会／SRC）

提出されたペーパーは、2018年11月の日本国際政治学会で発表されたものでした。ロシアは、内外からの圧力がかかりにくく、政権が腐敗防止政策を推進するインセンティブが弱いにもかかわらず、腐敗防止に向けた制度変更がなぜ行われるのかというのがこの論文の問題意識でした。取り上げられた事例は、腐敗防止策のなかでも注目されることの多い公職者の資産公開制度でした。ロシアでは、閣僚や国会議員だけでなく、地方自治体や国営企業などを含む幅広い公職者がこの対象となっているとのことでした。討論では、国際規範というものをどのように理解すべきかという問題や、腐敗防止という問題と権威主義体制との関係について、多くの質問・コメントが出されました。国内のアクターと国際的なアクターとの関係についてもっと考えるべきではないかと、資産公開制度の機能の実態についてもより詳しく記すべきでないかななどの意見も出ました。[田畑]

1月15日：**高橋美野梨**「EUの『クジラの生と死に対する管理』とその政治的含意」
コメンテータ：森下丈二（東京海洋大学）

提出されたペーパーは、分担者として参加している科研費プロジェクトの成果論集に収録予定のものということでした。報告者の得意とするグリーンランドの捕鯨問題ではなく、EUのクジラをめぐる政策についての議論でした。コメンテータの森下氏からは、「EUはグローバルな環境問題に対する影響力を高めるために鯨に注目した」というのがこのペーパーが提

示した新しい視点であるとの指摘がありました。すなわち、従来の見方は、NGOなどの鯨への対応が変わったことにより、EUの政策の変化が生じたというものであったとのことでした。この新しい視点については、森下氏を含めて、いろいろな反論や意見が述べられました。森下氏が国際捕鯨委員会（IWC）の日本政府代表を務められていることから、討論では、IWCでの議論や意志決定のなされ方、そのなかでのEUの果たしている役割など、非常に興味深い情報提供や質疑がありました。おりしも日本の脱退問題により、関心を集めている時期でしたので、IWCやそのなかでの日本の立ち位置について理解を深めるための絶好の機会となりました。[田畑]

1月16日：高橋沙奈美「ポスト社会主義圏における公共宗教の新しい形：ウクライナにおける危機と宗教」

コメンテータ：松里公孝（東京大学）

提出されたペーパーは、分担者として参加している科研費プロジェクトの成果出版として刊行予定のものだったということでした。初めてウクライナの宗教問題にチャレンジした意欲的なものでした。コメンテータの松里氏のもとに従うと、ペーパーでは、教会自立をめぐる教会法上の問題、正教地理、ミクロレベルでの公共活動（社会貢献活動）の3つが扱われました。とくに、ウクライナ正教会のモスクワ総主教座とキエフ総主教座の対立をめぐる話を中心となっていました。ウクライナ正教会の内実をよく知る松里氏からは、こうした対立をロシア対ウクライナという枠組みだけで捉えるべきではなく、ウクライナ社会の内部問題あるいはその分裂という側面から分析すべきであるとか、ウクライナにおける世俗主義や民族主義の理解に関してコメントがなされました。討論のなかでは、公共圏というものの理解の仕方やインターネット情報の扱い方など、幅広い議論がなされました。[田畑]

1月29日：斎藤慶子「第6章 予備的考察2 1930～50年代のソヴィエト・バレエ作品の特徴、第7章 バレエ『まりも』とソ連のバレエ普及政策としての文化イベント」

コメンテータ：半谷史郎（愛知県立大学）

提出されたペーパーは、報告者が1月16日に学位を取得した博士論文「日本バレエ教育史における転換点：チャイコフスキー記念東京バレエ学校（1960-1964）とソヴィエト・バレエ」の2つの章でした。コメンテータを含めて、ソ連の文化政策と民族政策の観点からの議論が多かったように思われました。たとえば、ソ連における「ロシアを中心としながら主要な民族文化を作る」という方針と、日本において「民族バレエ」を作ろうとしたこととの関係性について、いろいろな議論が出ました。『まりも』はアイヌの踊りと話に基づくものであり、それを日本における民族バレエの題材にしたことの意味についても質問がありました。また、民族バレエが上演された「デカーダ（特定行事のための旬間）」と呼ばれる舞台芸術コンクールについても、文化政策・民族政策における中央と地方の関係に関わる質問が出されました。バレエの形態の1つである「ドラムバレット」についても質疑があり、あまりセンターで議論することのなかったバレエを題材にして、活発な議論ができたように思いました。[田畑]

1月30日：後藤正憲 “Rearranging Opposition in Sakha Stock-Raising”

コメンテータ：大西秀之（同志社女子大学）

提出ペーパーは、サハ共和国の研究者との共著論文のもとになる報告者の担当部分の草稿であるとのことで、報告者のサハにおけるフィールドワークの成果を、2項対立という視点からまとめたものでした。2項対立として挙げられたのは、レナ川の左岸と右岸、牛と馬の飼養、農民経営（いわゆるフェルメル）と住民経営（ソ連期の個人副業経営）の3つの対抗

軸でした。討論では、この2項対立という分析枠組みの有効性に関わる議論が中心になったように思われました。この3つの対抗軸の間の関係性や、この対抗軸は当事者が認識しているものなのか、それとも調査者が設定したものなのかという点、この2項対立が変化していくことをどう理解するかなどの論点が出されました。農民経営と住民経営の対抗軸に関係して観察されるようになったというネットワークングに関して多くの質問が出されました。フィールドワークの事例などをこうした論文に有効に入れていくことの難しさについても考えさせられる機会となりました。[田畑]

2月12日：加藤美保子「地域秩序から考える『太平洋のロシア』」

コメンテータ：浜田樹子（一橋大学）

提出ペーパーは、共同研究として行っている「東アジアの安全保障秩序の変動」の中間報告としてまとめたものということでした。この共同プロジェクトでは、報告者が唯一のロシア専門家であり、ロシアの観点から太平洋秩序を考えることが要請されているとのことでした。ペーパーの内容は、2000年代のロシアの世界認識の変化、東方シフトとアメリカ・ファクター、朝鮮半島問題とかなり多岐にわたるものでした。討論のなかでは、東アジアにおいてはロシアは現状維持のバランス外交を志向しているという報告者の主張に対して、いろいろな意見が出されました。東方シフトというときの「東」の範囲についても、これを太平洋へのシフトととらえる報告者の見方について議論がありました。このほか、1990年代と2000年代以降のロシアのスタンスの違い、ロシアによる日米同盟の位置付けとその日米関係への影響、オホーツク海の安全保障上の位置付けの変化などについても、質疑が行われました。[田畑]

非常勤研究員セミナー

1月21日：村上智見「モンゴルの唐様式墓から出土した染織品の研究」

コメンテータ：齊藤茂雄（早稲田大学）

提出ペーパーは、現在行っている研究をまとめたもので、ある研究誌に投稿中であるとのことでした。内容は、2009年と2011年にモンゴルで発掘された7世紀の唐の時代の墓から出土した副葬品としての染織品を分析したもので、それらの染織品が中国製なのか、それとも西方製なのか、それらは唐が送ったものなのかといった点に関する考察を行ったものでした。コメンテータの齊藤氏は、唐の時代のトルコ系遊牧民に詳しい文献学者で、2つの墓のあった地域で、この時代に何が起こっていたのかについての説明がありました。この時代は、唐においても西方地域においても大きな変動の時代であり、こうした状況と出土品との関係について、様々な意見が出されました。センターにおいて考古学者による物の分析が行われることは、あまりないわけですが、歴史学者との間での討論は、大変興味深いものでした。[田畑]

1月31日：伊藤愉「音楽的構成に基づく上演空間：1926年、メイエルホリド演出『査察官』」

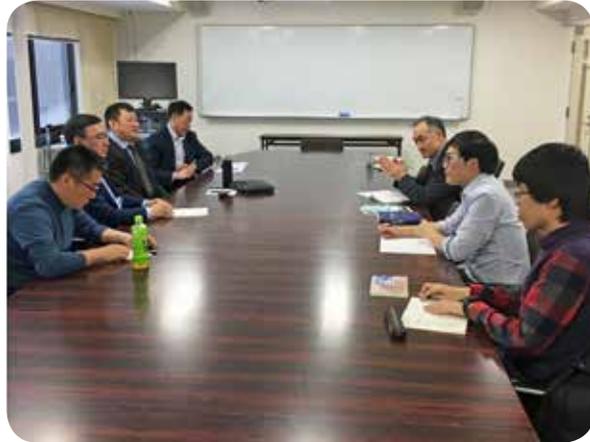
コメンテータ：八木君人（早稲田大学）

提出されたペーパーは、執筆中の博士論文の一部であるということ、1926～1938年に上演されたメイエルホリドの演出による『査察官』の音楽的構成の特徴を明らかにしようとするものでした。コメンテータからは、このペーパーにおける「音楽」とか、「音楽的構成」とかいった言葉が何を意味するのかという本質的な質問が出されました。音楽的構成というのは、目的なのか手段なのかという質問もありました。レニングラード学派の演劇学者であるグヴォズジェフとメイエルホリドとの関係に関する質問も出されました。相互にどのような影響を受けているのかというものです。討論のなかでは、客席と舞台との間に同一の空間

を立ち上げるこの意味であるとか、観客と俳優の身体の関係性であるとかについてのコメントが出され、10年以上にわたって観客に受容され続けたのはなぜかという質問も出されました。かなり専門性の高い内容であったためか、発言した出席者があまり多くなかったのは残念でした。[田畑]

◆ 黒竜江省社会科学院の研究者の滞在 ◆

黒竜江省社会科学院のロシア研究所と北東アジア研究所の研究者計4名が2年半ばに1週間ほどセンターに滞在されました。来られたのは、ロシア研究所の馬友君所長と封安全副研究員、北東アジア研究所の張鳳林副所長と殷勇助理研究員です。封安全さんは、2009年にスラブ社会文化論専修で博士号を取得した方です。センターの田畑が行っている「ユーラシア地域大国（ロシア、中国、インド）の発展モデルの比較」に関連して、意見交換を行うことを目的に招聘されました。一行は2月13



意見交換のようす

日にセンターで開かれたロシアの住宅と極東経済開発に関する研究会に出席されたほか、翌14日にはセンター教員・研究生との意見交換会に参加されました。中口の比較に関わる議論のほか、今後のセンターと黒竜江省社会科学院との研究交流についても意見を交わしました。[田畑]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース155号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。（中央アジア映画上映会についてはエッセイなどをご覧ください。）[大須賀]

- 11月9日 アレクサンダー・ブフ（ヴィクトリア大、ニュージーランド）「中国の台頭及びタイ、韓国におけるナショナル・アイデンティティの変貌」（SRC-NIHU セミナー）
- 11月12日 野口健太（株式会社事業革新パートナーズ、リーダー、2011年度修士卒業生）「ロシアにおけるビジネスの可能性と課題～現場目線から～」（昼食懇談会）
- 11月15日 Gerhard Neweklowsky（ウィーン大学、オーストリア）“Burgenland Croatian as a Čakavian Literary Language”（SRC 連続講義）
- 11月20日 伊藤庄一（日本エネルギー経済研究所）「米国シェール革命とロシア：北東アジア・エネルギー安全保障の新展開（中間報告）」（客員研究員セミナー）
- 11月22日 宮川絹代（札幌大）「20世紀ロシア詩を繋ぐ：途切れた青の行方（ゲオルギー・イワノフとボリス・リュジー）」（北海道スラブ研究会）
- 11月26日 森下嘉之（茨城大）「第二次世界大戦後の中東欧における学知再編と『地域史』の構築：『民俗学／歴史学者』ヴァルター・クーンの活動を通して」（客員研究員セミナー）
- 12月15日 「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」プロジェクト型共同研究報告会（共同利用・共同研究拠点公募研究報告会） 醍醐龍馬（小樽商科大）「外交官から見た近現代日露関係史：榎本武揚、芦田均、Γ.B. チチャーリン」；志田仁完（環日本海経済研究所）「経済制裁下のロシア地域企業」；道上真有（新潟大）「ロシア・

- 中国住宅市場の現状と特殊性：移行諸国の住宅市場論に向けて」
- 12月18日 アセリ・ビタバロヴァ（北大文・院）「中央アジアにおける新シルクロード構想の具体化に向けて：中国・カザフスタン関係を中心に」（北海道中央ユーラシア研究会第132回例会）
- 12月19日 ティムール・ダダバエフ（筑波大）「日中韓の対中央アジア戦略に関する多角的分析：対ウズベキスタン経済協力行動計画の比較を中心に」（客員研究員セミナー）
- 12月21日 第28回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 安達大輔（センター）「帝国の虚ろな風景：19世紀ロシア文学と否定性の実験」
- 1月9日 SRC特別セミナー「Rethinking Soviet War Films」 Kristian Feigelson (Sorbonne Nouvelle University) “Soviet Film’s War: Between History and Memories”; Gulnara Abikeyeva (SRC/ Kazakh Leading Academy of Architecture and Design) “Why in Soviet Times There Were Few Kazakh Films about the Second World War?”
- 1月11日 加藤有子（名古屋外国語大）「ポーランド未来派と黄禍論」（客員研究員セミナー）
- 1月21日 松元晶（北大文・院）「クルグズスタン・第三回遊牧民スポーツ世界大会を歩く」（北海道中央ユーラシア研究会昼食懇談会）
- 1月25日 松澤祐介（西武文理大）「ネオリベラルなEU指令の中欧諸国での受容：EUの『鉄道パッケージ』と中欧諸国の旅客鉄道改革」（客員研究員セミナー）
- 1月28日 Aleksandra Jarosz (Nicolaus Copernicus University/JSPS Foreign Research Fellow) “Nikolay Aleksandrovich Nevskiy: Self-Made Pioneer of Miyakoan Linguistics, Unwitting Pioneer of Japonic Ethnolinguistics”
- 2月5日 熊倉潤（日本貿易振興機構アジア経済研究所）“One Belt One Road and China’s influence in Central Asia” (NIHU セミナー)
- 2月8日 J-ARCNet 公開セミナー「自治と米軍基地：グリーンランド・沖縄・オロンガボ」開催
- 2月13日 ロシアの住宅と極東経済開発に関する研究会（公募プロジェクト型共同研究報告会） 道上真有（新潟大）「体制移行後の住宅市場形成、政策の役割：ロシアと中国の比較から」；志田仁完（環日本海経済研究所）「プロジェクトの概要と現地調査の報告」；志田仁完「極東地域経済と現状と開発政策」；菅沼桂子（日本大）「極東経済特区への外資進出状況」；カン・ビクトリヤ（帝京大）「ロシアの経済特区の意義と実績：極東経済特区への教訓」
- 2月21日 「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」共同研究班「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究」報告会
- 2月22日 プロジェクト型共同研究成果報告会「外交官から見た近現代日露関係史」

中央アジア映画上映会について

ビタバロヴァ・アセリ（センター学術研究員）

中央アジア映画上映会が、2018年10月から2019年1月にかけて、センターに於いて全4回の日程で開催された。カザフスタンの有名な映画評論家であるグルナラ・アビケエヴァ先生（Gulnara Abikeyeva、カザフ中央土木建築アカデミー教授）がセンターに滞在されることになったのが、そのきっかけだった。2018年10月、来札されたばかりのアビケエヴァ先生が、中央アジア映画特集上映会を開催するというセンターの大学院生の提案を歓迎し、その実現に向けて積極的に取り組んだ。おかげで、中央アジア地域4ヶ国—カザフスタン、クルグズスタン（キルギス）、タジキスタン、ウズベキスタン—の世界的にも高い評価を得た人気作品が揃い、日本ではなかなか観る機会の少ない中央アジア映画を紹介することができた。さらに、映画の上映前にはアビケエヴァ先生は映画監督や各国のソ連崩壊後の映画産業の状況について語ってくださった。上映後には、アットホームな雰囲気の中、活発な意見交換が行われた。このような貴重な勉強の機会を与えてくださったアビケエヴァ先生に、この場を借りて深く

御礼申し上げます。以下、第1回～第4回中央アジア映画上映会のそれぞれについて簡単に紹介したい。

.....

中央アジア映画上映会開催情報

第一回上映会：2018年10月17日、15:00～17:30

映画：『父への電話』、原題：Әкеге қоңырау шалу（2017年／カザフスタン／約90分）

映画監督：セリック・アプリモフ（Серік Апрымов）

第二回上映会：2018年11月28日、15:00～18:00

映画：『父の遺言』、原題：Атанын керәэзи（クルグズスタン／2016年／約120分）

映画監督：バクト・ムクル&ダスタン・ジャバル・ウウル（Бакыт Мукул & Дастан Жапар уулу）

第三回上映会：2019年1月17日、16:30～18:30

映画：『不屈の精神』、原題：Сабот（ウズベキスタン／2018年／78分）

映画監督：ラシッド・マリコフ（Рашид Маликов）

第四回上映会：2019年1月28日、13:30～16:00

映画：『右肩の天使』、原題：Фариштаи кифти рост（タジキスタン／2002年／89分）

映画監督：ジャムシェド・ウスモノフ（Ҷамшед Усмонов）

※『父の遺言』と『不屈の精神』という邦題は原題からの筆者による直訳である。

.....

カザフスタン出身のセリック・アプリモフ監督の新作『父への電話』（2017年制作）がこうした一連の特集上映会の第一弾だった。2018年、ニカ賞（ロシアの映画アカデミー賞）にノミネートされ、同年8月、オレンブルグで行われた「イースト・ウエスト」国際映画祭で最優秀賞を受賞。この作品は、主人公のエルキン（Еркін）の成長物語である。彼は、家事や父



『父への電話』上映後の討論会

の仕事の手伝いをよくし、素直な子だが、両親の愛情に包まれずに育つ。注意欠陥・多動性障害と診断されたために、状況はさらに悪化の一途をたどることになる。兄の死後、母は家を出てしまう。それから6年経ったある日、エルキンは酔っ払った父親から自分の夢について聞かれる。彼の夢は都会の学校に通うことだ。しかもそのためには孤児院に入ることを願うという。そうすると、父は賄賂として一頭の雄牛を提供し、児童養護施設にエルキンを入所させてもらうことにする。最後のシーンでは大人になった息子が父に電話を掛ける。

日本の中央アジア映画ファンの間でも馴染みの深いアプリモフ監督は全ソ連国立映画大学出身で、カザフ映画の新しい波の旗手としても知られている。彼は『ザ・ラストストップ』（原題：Конечная остановка、1989年制作）、『アクスアット』（原題：Аксуат、1998年制作）、『三人兄弟』（原題：Үри брата、2000年制作）や『ハンター』（原題：Охотник、2004年制作）など、



クルグズ映画についてのレクチャーの様子

を意味する。アビケエヴァ先生の解説によると、アプリモフ監督が、これらの作品を通して、自由でたくましい若者世代（自由な未来）と責任が欠けている年長者世代（年長者を国や社会に喩える）を対比させているという。

第二回上映会では、クルグズスタン出身のバクト・ムクル監督とダスタン・ジャパル・ウウル監督によるデビュー作『父の遺言』（2016年制作）が上映された。本作は、2016年、モントリオール世界映画祭金賞などを受賞し、同年アカデミー外国語映画賞の候補に選ばれた。主人公のアザト（Азар）は、父の遺灰を携えて、アメリカから故郷に戻ってきた。それは亡き父ムラト（Мурат）の「自分を故郷に埋葬してほしい」という遺言を叶えるためだ。中央アジアの真珠とも呼ばれるイシククル湖の近くの小さな村が舞台。ムラトは15年前にこの村の人たちから借りたお金を返さずにアメリカに逃亡したという。アザトは父の汚れた名誉を回復するために借金をすべて返済した。また落ちぶれてすさんだ家を修理し、父の代わりに投獄された親戚とも和解することができた。そして、父はようやく地元の墓地に埋葬され、現世に借りを残さずに旅立つことができた。

映画上映後には、葬儀をめぐる習俗、クルグズ伝統文化、村落空間の荒廃問題、などについて議論が行われた。そして、前回と同様に、主人公の名前のシンボリズムが指摘された。また、アビケエヴァ先生は、クルグズスタンを代表する監督の映画を紹介しながら、クルグズ映画が同国の民主化プロセスをどう反映しているかを考察した。私にとって特に興味深かったのは、クルグズ映画とカザフ映画の比較であった。たとえば、前者は社会のイメージを構築するまたはコミュニティの重要性を強調するといった集団的な意識が顕著であり、これに対し後者は個人主義的な傾向が目立つという。概して、デビュー作となる『父の遺言』は、ムクル監督とジャパル・ウウル監督のポテンシャルを大いに感じさせる力作である。彼らがこれからどのような映画を作っていくのか、楽しみだ。

第三回上映会ではウズベキスタン出身のラシッド・マリコフ監督による『不屈の精神』（2018年制作）が上映された。映画上映前には、アビケエヴァ先生が中央アジアのハリウッドとも呼ばれるウズベキスタンの映画産業の特徴について紹介してくださった。ウズベキスタンの映画会社は一年で約80本の長編映画を制作し、そのうち約15-18%は国营映画会社ウズベクフィルムによるものであるという。ウズベク映画が国内で配給される映画全体の9割を占める。そして、（私有の）映画会社や映画館が多いことが、中央アジア地域内最大の人口を擁するウズベキスタンの特徴であり、映画ビジネスが盛んなのだ。

共感を覚えるような素晴らしい作品を数多く作ってきた。

『父への電話』の上映後の討論会では、親子関係や家族問題、村落社会の衰退、腐敗問題、日本社会との比較など、多様な視点から意見が交わされた。ここで注目に値するのは、『父への電話』はアプリモフ監督が2013年に作った『ひとり』との共通点がみられるという点である。そのうち最も顕著なのが『ひとり』の主人公も「エルキン」という同じ名前であることだ。「エルキン」はカザフ語で「自由な」

『不屈の精神』は、2018年、第40回モスクワ国際映画祭ロシア映画批評家賞などを受賞し、同年主演のカリム・ミルホディエフが第12回アジア太平洋映画賞（APSA）・男優賞にノミネートされた。本作の舞台となるのは1989年のカラカルパクスタン。主人公のサイドウラ（Сайдўлла）は、アフガニスタン戦争に参加した元ソ連軍大尉だ。彼は今地元にある学校の体育教師を務め、一人暮らしをしている。サイドウラの息子は同じ村に住んでいるが、父と親子の縁を切り、自分の息子との接触を拒否する。ある日サイドウラは末期癌で余命わずかだと宣告される。だが彼には解決すべき課題がまだ残されている。

視聴者からの指摘の通り、今から約30年前のソビエト・ウズベキスタンが『不屈の精神』の舞台となっているが、そこで描かれた社会状況は、時間と空間を超え、（旧ソ連圏の多くの地域に共通する）現在の状況を見事に描写している。サイドウラの勤める学校は中央アジアのどの地方にでもあるようなごく普通の学校だ。彼が水供給の



ウズベク映画産業について語るアビケエヴァ先生

のために賄賂を提供するあのエピソードにも、中央アジアの人々はあまり驚かないだろう。また、アフガニスタン戦争という同地域の歴史上の重要な出来事に触れていることはこの映画を特徴づけている。ほんの短いエピソードだが、ソビエト兵士が自分の仲間によって射殺されたあのシーンは、改めて人間性を奪う戦争の悲劇について考えさせられた。

第四回上映会の上映作品は、タジキスタン出身のジャムシェド・ウスモノフ監督の『右肩の天使』（2002年制作）であった。この映画は、2002年第55回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門にノミネートされ、同年第46回BFIロンドン映画祭FIPRESCI賞にも選ばれた。また第3回東京フィルメックス審査委員特別賞、第16回シンガポール国際映画祭シルバー・スクリーン・アワード、第17回Nika賞CIS・バルト三国最優秀作品賞など世界的にも高い評価を得た作品である。『右肩の天使』はタジキスタンの北部を舞台に物語が展開する。主人公のハムロ（Ҳамро）は母危篤の報に接して10年ぶりに故郷のアシュト村に戻ってくる。だがこれは、彼の母が息子をだまして家をリフォームさせるための企みだった。こうしたなかで、ハムロは借金で身動きが取れなくなる状態に陥ってしまい、さらに、これまで一度も会ったことがない息子を渡される。結局はハムロを助けようとする老母は村長に最期の願いをする。そして、その願いは叶うことに。

いうまでもなく、1992年から約5年間にわたったタジキスタン内戦は同国の映画産業に深刻な影響を及ぼした。国営映画会社タジクフィルムは2002年に至るまで閉鎖されたままだった。だがそんな状況下でも、バフティヤル・フドイナザーロフ（Бахтияр Худойназаров）監督やウスモノフ監督は、国際的な注目を集めた、タジキスタンを代表する優れた映画を制作した。たとえば、ウスモノフ監督による『蜂の飛行』（原題：Парваз-е занбур、1998年制作）や『井戸』（Колодец、2000年制作）や『天国へ行くにはまず死すべし』（Чтобы папаць в рай, надо абязавельна умереть、2006年制作）は日本の映画祭で公式上映され、映画ファンの間でもその名が知られるようになった。フドイナザーロフ監督が1993年に制作した内戦下のドゥシャンベを舞台とした『コシュ・バ・コシュ、恋はロープウェイに乗って』（原題：Кош ба кош）は、ソ連崩壊後、国際的評価を獲得した最初の中央アジア映画である。また、アビケエヴァ先生が述べたように、イラン出身のモフセン・マフマルバフ監督が内戦後のタジク映画の復興に



『右肩の天使』上映後の討論会

研究支援推進員、大学院生のミルラン・ベクトゥルスノフさん、松元晶さん、寒い中にもかかわらず、わざわざ足を運んでくださった方々に、この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。おかげで、日本をはじめ、カザフスタン、クルグズスタン、ロシア、ポーランド、モンゴル、アメリカ、中国、台湾など、世界中のいろいろな国からの参加者が集まり、上映会は大成功だった。

大きく貢献したことは注目に値する。2010年代に入ると、タジキスタンの映画産業では新しい監督が次々と登場し、タジク映画が復興に向けた姿をみせてくれた。

以上、各上映会の概要について述べた。最後に、この上映会のために、ご協力いただいた宇山智彦先生をはじめ、忙しい中準備をしてくださったセンターの笹谷めぐみ研究支援推進員、小谷内千尋研

二つの季節より長い時間

グルナラ・アビケエヴァ（カザフ中央建築土木アカデミー／センター 2018年度特任教授）



着物姿で

違えてパルメザンチーズを買ってしまっ初めて、彼女のしてくれたことが過剰なものでは

私の北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターでの研究滞在は2018年10月から2019年の2月までの4か月間でした。しかし、私はここに一年間滞在したような感覚があります。この期間は、大変充実し、輝かしく、実り多いものでした！

常に最も大変なことは滞在する国への適応でしょう。その国の言語を知らない場合はなおさらです。漢字で3行にわたって書かれた滞在先の住所にさえたじろいでもいました。しかし、センターではあらゆることについて事前に考えられていたのです！ソ連・ポストソ連映画における「アジア人」表象の形成について学んでいる大学院生の松元晶さんが空港で迎えてくれた時は嬉しく思いました。

空港から電車に乗っている間、日本という国が窓の向こうにあるというのに窓を一度さえ見ないほど、私たちは夢中になっておしゃべりしていました。晶さんと一緒に、私のために大学が用意してくれた広々としたアパートに着きました。彼女は家にあるすべてのものがどのように動くかを教え、親切に私と一緒に近くの店に行ってくれました。次の日私一人で、店で塩と間

ないことを理解しました。

朝、大須賀みかさんが大学までの道のりを案内するために私を迎えにきました。私は彼女に会えてとても嬉しかったです。私の滞在に関する庶務的な事柄について、まさに彼女と長期にわたるやり取りをしていたわけですから。そして最後に、センターで事務の中川裕子さんは、仕事のために必要なカード類と説明書を用意してから、私に契約書を説明し個人用の研究室へ案内しました。私の直接のアドバイザーである宇山智彦教授はその時中央アジアに出張中でしたが、彼は、私の日本での適応を手伝うようにと空港に晶さんを迎に行かせていました。このように私はあらゆる方面から手厚く面倒



夫と博物館で

を見られ、そのおかげで仕事に着手できたのです。

スラブ・ユーラシア研究センターでの滞在のために私が掲げた研究テーマは、「中央アジアにおける『ソヴィエトの人間』の社会的モデル化：文学と映画を通して」です。しばらく時間がたってから、このテーマはとても広く、カザフスタンの映画の分野に絞った方がやりやすいことがわかりました。

映画はイデオロギー的な産物でありながら、その時のリアルを映しているというよりも、むしろ一定の価値観と行動のモデルを持つ「ソヴィエト市民」のイメージを形成してきました。カザフスタン映画は長年、中央、つまりモスクワで規定されたイデオロギーの影響のもとにありました。「もしロシア人になりたいければ、まずはカザフ人になれ」という不愉快な慣用語さえありました。これはなによりもカザフ人住民のロシア化、ソ連の歴史における様々な時代のカザフスタンへのスラブ人の多くの移住、そしてもちろん国が構築した政策によって生じました。スローガンやポスターの中で出来上がったイデオロギーが、詩や歌、映画を通して市民に普及したということは興味深いでしょう。

ソ連時代の映画においてどのような基本的なイデオロギーが機能していたのでしょうか。

- ・芸術は「形式において民族的で、内容において社会主義的でならねばならない」。「我々は我々の新しい世界を作る。何者でもなかった者が、すべてになる」。
- ・ソ連における芸術、それは「社会主義的なリアリズム」という芸術のみである。
- ・ソ連は、諸民族の友好を最重要視する多民族国家である。「広い国、私の母国、そこにはたくさんの森、野原、川がある。私は人間がこれほど幸せになる国を他には知らない」。
- ・中心となる善なる主人公、それは共産主義の建設者である。「私たちはおとぎ話を実話にするために生まれてきた」。
- ・女性像は、やはり共産主義の建設者であり、男性と同等に強い。東方の女性についての話であれば、彼女は金持ちの夫のもとから逃げだし、勉強するために都会に行き、労働青年の進学予備校であるラブファクに進学し、教師や医者キャリアを得る。

映画研究者の仕事は何よりも映画分析にありますから、私はソヴィエト・カザフ映画の再考察に着手しました。早い段階でわかったのは、年あるいは十年ごとの映画の過程分析といった時系列ではなく、様々なジャンルの映画分析を通して見るアプローチが必要だということです。ジャンルこそが、あれこれのイデオロギーの担い手だったのです。例えば、歴史的な革命映画は「ソヴィエトの国」の新しい歴史を描くことに責任を持ち、コメディはソ連の平穩で楽天的なイメージの創造を担当し、戦争映画は愛国心に訴え、そして子ども映画は「私たちの幸せな幼少期」を描くといった具合です。私の研究の結果について詳しくは、スラブ・ユーラシア研究センターの雑誌 *Acta Slavica Iaponica* に寄稿する論文でご覧いただけるでしょう。

本や論文、辞書といった、ほぼすべての必要な資料を手元で利用できる北海道大学の優れた図書館の存在は、私の仕事にとって大きな助けとなりました。

研究と並行して、私のアドバイザーである宇山智彦教授のイニシアティブにより、私たちは現代中央アジアの映画の上映会を催しました。

ここで少し話がそれますが、私たちの地域である中央アジアの映画人にとって、1994年11月に東京で開かれた中央アジア映画祭がいかに重要なイベントだったのかについてお話ししたいと思います。その映画祭は国際交流基金が主催し、5カ国のそれぞれから4、5本の映画が公開されました。そのうえ、ただの上映ではなく、映画制作者との会合や質疑応答もありました。映画祭は約2週間にわたって開催され、おそらく中央アジア地域の映画にとって、最も大規模な文化イベントでした。ソ連時代の「鉄のカーテン」の陰で誰にも特に知られていなかった「新しい」アジア人映画制作者に、日本はいわば「ドアを開いて」くれたのです。その時、東京からいらしていた映画研究者の大久保賢一さんと、在カザフスタン日本大使館で勤務していた宇山智彦さんが、この映画祭を準備してくれました。

24年の年月を経て、ここ北海道大学で私たちは、より控えめな形でミニ中央アジア映画祭を開催しました。私たちは、カザフスタン映画のセリック・アプリモフ監督『父への電話』(2017)、クルグズスタン映画のバクト・ムクル、ダスタン・ジャバル・ウウル両監督『父の遺言』(2016)、ウズベキスタン映画のラシッド・マリコフ監督『不屈の精神』(2018)、そしてタジキスタン映画ジャムシェド・ウスモノフ『右肩の天使』(2002)を観ました。それぞれの上映会では、各国の映画界の現況について私の短い紹介と、上映後の活発なディスカッションも行いました。もし博士課程のアセリ・ビタバロヴァさんの助けがなかったら、これら上映とディスカッションはここまでうまくいかなかったでしょう！彼女は上映会の構成を助けただけでなく、本当に興味がある人たちを会に誘っていました。

今回の滞在の間、日本の他の大学や公共機関でも講義が開かれました。大阪にある国立民族学博物館では、藤本透子准教授の招待により、「映画に描かれるカザフ村落の神話と現実」という講演を行いました。博物館の中にある、カザフスタンについての広々とした展示が私を驚かせました。それは、カザフ人の伝統や儀礼を研究しながら、数年間をカザフスタンで過ごした透子さんの努力で出来上がっていたのです。彼女がカザフスタンを研究しているのは、私たちにとって何と幸運なことだろうと思いました。彼女の努力、それも博物館の展示だけではなく彼女の論文や本のおかげで、日本で私たちの国、カザフスタンについてより多くのことを知ってもらえるのですから。民博は私の仕事仲間である映画研究者の旦匡子さんと一緒に、エルラン・ヌルムハンバトフの『クルミの木』他のカザフスタン映画を上映したこともありました。

二度目の出張では、楯岡求美准教授の招待のもと東京大学へ行きました。そこで私は、『『独立の子』たちが作るカザフ映画：アディルハン・エルジャノフとエミル・バイカジンの映画は何を語るか』という講義を行いました。スラブ学を専攻する修士課程・博士課程の院生が



求美さんと

訪れ、大きな関心に包まれた教室は、質疑応答を重ねることで、新しいカザフスタン映画についての情報を理解する場となりました。

東京では、すでに触れましたが東京の中央アジア映画祭を組織していた一人でもある大久保賢一さんや、映画研究者の井上徹さん、プロデューサーの佐野伸寿さんと会う機

会にも恵まれました。

一人の人間にここまで多くのことが依存しているとは！日本では、この考えが始終私の頭から離れませんでした。藤本透子さんは民族学の領域でカザフスタンとの橋をかけ、宇山智彦さんは歴史学の分野で中央アジア全体に対応し、佐野伸寿さんはセリク・アプリモフ『三兄弟』、アミル・カラクロフ『最後の休暇』、エルラン・ヌルハンベトフ『春、一番最初に降る雨』等のようなカザフスタン・日本合作映画のプロデューサーです。国の機関というよりも、具体的な人々がカザフスタンと日本の文化の関係を結んでいることがわかりました。みなさんどうもありがとうございます！

東京から札幌に戻り、私は素晴らしいシンポジウムにうまく居合わせました。スラブ・ユーラシア研究センターが主催する冬期シンポジウムと呼ばれるものです。言語学のテーマでしたが、シンポジウムはとても興味深く、運営の水準が非常に高いことに私は感動しました！素晴らしい報告、華々しい報告者、関心をひかれるディスカッションがあり、客観的な原因によって到着できなかった一人の参加者の発表はオンラインで提供されました。シンポジウムでは、センターの教授陣の野町素己さん、山村理人さん、安達大輔さん、斎藤慶子さん、そして外国からのシンポジウム参加者とより深く知り合うことができました。

忘年会でもセンターの研究員の方たちと知り合い、親しくなることができました！学者の宴会でトナカイを連れたサンタクロースに出会うとは、思ってもいませんでした！雰囲気は柔らかく、睦まじいものでした。私たちは、文化人類学者の後藤正憲さん、ロシアのムスリムを研究している長縄宣博さん、コリャーク語を専門とするユニークな研究者永山ゆかりさん、ロシア正教に関する研究者高橋沙奈美さんらと喜んで親密に交流しました。沙奈美さんから忘年会の写真を受け取ったのはとても嬉しいことでした。

博士課程のミルラン・ベクトウルスノフさんは、各回の中央アジアの映画上映会の写真を私に送ってくれました！ミルランさんはアセリさんや晶さんと同じく、一般的に外国人によくある日常生活上の問題が生じた時に助けてくれました。特に、チケットをとったりホテルを予約したりするために、最新の電子機器やコンピューターを使う時です。快く助けてくれてどうもありがとうございます！

読者の皆さんは、何らかのテーマの仕事をする際、まるであらゆるものがその周りで形を成していくかのような現象に気づかれないでしょうか？ソヴィエト文明についてのテーマを研究している時、私は福岡求美さんからポスト・ソヴィエト諸共和国におけるロシア語の役割についてのシンポジウムに参加する招待をいただきました。私の報告のテーマは「カザフ

映画に見られるロシア人イメージ：『長兄』から『見えざる者』へ」です。私がアルマトウで事実上ロシア語話者の空間で暮らしながら、独立後のカザフスタン映画にロシア人の登場人物がほとんど現れなくなったことにこれまで気づかなかったのは、不思議なことです。彼らに代わって、フランス人やアメリカ人、韓国人、アフリカ系アメリカ人まで現れました。ソ連時代にはすべてが全く違っていました。「長兄」であるロシア人は、どんなカザフスタン映画にも必ず登場していたのです。仙台にある東北大学でシンポジウムが開かれました。そこで私はソヴィエト文学、映画を研究している教授の中村唯史さんと知り合いました。二人とも『昼の星』について論文を書いていたことが会話の中で明らかになった時、私たちはとても驚きました。彼はオリガ・ベルゴリツの散文について、私はイーゴリ・タランキンとの同名の映画について書いたのです。その時中村さんから、彼が働いている京都大学で、「『昼の星』に秘められた詩学：文学と映画の点から」という講演を二人で行う提案を持ち掛けられました。すでに忘れられかけている1966年の映画に関するとても特殊な話のように見えたが、神戸や大阪からスラブ学の専門家がたくさんこの講演に集まりました。テーマに関する活発な議論が展開され、人々は自身の見方を共有しあいました。映画研究者である扇千恵さんは、彼女が日本語訳を手掛けたネーヤ・ゾールカヤ『ソヴェート映画史：七つの時代』というソ連映画に関する本を私にくれました。

しかし、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで開かれた戦争に関するソヴィエト映画を取り上げたセミナーが、私にとってこの4か月間で最も重要なものとなりました。私と映画や文学に関する様々な問題を話し合っていた越野剛さんは私に、フランス人研究者のクリスチアン・フェイゲルソンとの合同セミナーを提案しました。クリスチアンは、「雪解けの時代」の優れた映画である、『鶴は翔んでゆく』、『誓いの休暇』、『僕の村は戦場だった』が西欧でいかにして受容されたのかについて話しました。私は、「なぜソ連時代には戦争に関するカザフ映画がこれほどまでに少なかったのか」という問いに答えることを試みました。

ある意味でこのセミナーは、ソヴィエト・カザフ映画に関する私の研究のいくつかの結果を最初に公表した場所でした。そのあとクリスチアン・フェイゲルソンは、西洋の研究者が基本的にロシア映画について書いているという事実を確認しました。他の共和国の映画のことはあまり知られていませんでしたから。このことは私に、私の研究は先駆的であるだけでなく、本格的に重要なのだという確信を強めさせました。第三に、専門研究者の方々から投げかけられた質問は、歴史的な事実やデータをより綿密に研究する必要があるという結論へと私を導きました。

明日私はもう帰国しますが、ここで得た広い意味での教訓は、私と共にあり続けるでしょう。ここで得られた友人・知人関係も続いていくと思っています。ここで私が始めた研究は本に発展するだろうと期待しています。ここで過ごした時間は、秋と冬の一部という二つの季節よりもずっと大きなもので、本当に創造的な仕事、自然との触れ合い、各都市への出張によって満たされる時間となりました。そして最も重要なことは、日本そのものと同じく美しく興味を魅く人々との出会いだったのです！

(2019年1月31日執筆。ロシア語から松元晶訳、宇山監修)

第16回ベオグラード国際スラビスト会議に参加して

野町素己（センター）

2018年8月20日～27日まで、ベオグラードにて標記の国際会議が開催された。1929年に記念すべき第1回国際会議がプラハで開催されて以来、1939年から1958年を除いて⁽¹⁾、5年に1回スラブ諸国がホストをつとめてきた大規模な国際会議であり、今回で16回目を数える。「国際スラビスト委員会」に属する43カ国（2018年現在）が参加し、各国は研究者の代表団を毎回組織し、会議に派遣する形式をとっている。各国にはあらかじめ参加人数枠が決められていて、日本代表団の枠は過去数回の大会では5人程度であったが、今年には三谷恵子氏が交渉した結果、これまでよりも多い8人の枠が充てられた⁽²⁾。その他の各種部会やテーマ別セッションの参加者も含めて、最近では1000人～2000人程度が参加し、開会期間は1週間に及ぶ。こういった組織の特性からも、「スラブ学のオリンピック」のようなものとも言える。



国際スラビスト会議の会場となったベオグラード大学文学部

さて、ここでいう「スラブ学」だが、この研究集会は本来、いわゆる「フィロロジスト」が集うものとして始まった。つまり、スラブ人の文学、言語、歴史を研究する者たちのための研究集会であった。古典的な文献学からさまざまな言語研究の分野に、文学やフォークロ

- 1 幻のベオグラード大会はセルビア王立学士院院長であるアレクサンダル・ペーリッチを議長として組織され、1939年9月18日から25日にかけて開催が予定されていた。しかし同年9月に第2次世界大戦がはじまったため、開催は直前で中止された。その後、1947年に予定された第4回モスクワ大会は諸事情から1948年に延期されたが、同年にティトーとスターリンの対立など様々な政治問題が起き、結局開催されなかった。その後1958年に第4回大会がモスクワで開催されることとなる。その3年前の1955年に上述アレクサンダル・ペーリッチがイニシアティブをとり、ソ連・東欧諸国、西側諸国の著名なスラブ学者が参加した「ベオグラード国際スラビスト集会」が開催され、そこで国際スラビスト会議の母体となる、上記の「国際スラビスト委員会」が改めて成立した。なお、このベオグラード集会で、各国の学士院か主要大学がスラブ学に関わる刊行物全目録を作成することが合意され、日本に関してはSRC初代所長の木村彰一氏が目録編集の責任者となることが決められている。詳細は研究報告集 *Beogradski međunarodni slavistički sastanak* (1957) の第1章を参照されたい。
- 2 これは一般報告枠の数であり、国際スラビスト会議が組織する専門分野の研究者が委員を務める各部会の報告やテーマ別セッションなどは一般枠と関係なく応募が可能である。

ア研究から様々な文化研究に発展し、またスラブ言語文化に関わる様々な新しい学問領域が定着し、学際的な研究の重要性が指摘される今日、国際スラビスト会議もそのプロフィールを少しずつ変えつつあるが、それでも言語と文学がその基本である。したがって、名称だけではわかりにくいのが、ヨーロッパを中心とした国際中欧・東欧研究協議会 (ICCEES) や米国を中心としたスラブ・東欧・ユーラシア学協会 (ASEEES) といった地域研究系の大規模研究集会とは、だいぶ性質が異なる研究集会なのである。

日本は1978年の第8回リュブリャナーザグレブ大会に木村彰一氏らがオブザーバーとして参加し、またそこで国際スラビスト委員への加盟が認められた。そして1983年の第9回キエフ大会から正式に代表団を送りはじめ、今日に至る。その後、佐藤純一氏が2003年第13回リュブリャナ大会まで、伊東一郎氏 (早稲田大学) が国際スラビスト委員の日本代表を務められた。今回のベオグラード大会は、三谷恵子氏 (東京大学) が伊東氏の代理を担われ、全てのとりまとめ役を行った。今年からは村田真一氏 (上智大学) が代表に就かれる。

今回のベオグラード大会はセルビア人にとって悲願であったと言ってよい。というのは、1939年の幻の大会以来、セルビアはこの権威ある国際会議の開催地になっていなかったからである。今回は43カ国から1000人程度の研究者が参加したそうで、まずまずの盛会であったと言える。ここで詳細にプログラムの内容を書くことはできないが、基調講演2つ (いずれも言語学)、言語学28テーマ (58セッション)、文学12テーマ (49セッション)、スラブ学史3テーマ (7セッション) となっていたことから、その規模の大きさが想像できるだろう。

セッションの規模を述べると、言語セッションでは、方言学が7セッションと一番多く、続いて文法研究が6セッション、通時言語学が5セッションとなっている。その一方、社会言語学2セッション、言語政策1セッション、多言語性1セッションなどと少なく、分野の多様化は進んではいるものの旧ソ連・東欧の参加者が多い本国際会議では、スラブ語研究の伝統的な分野が根強いのが特徴的と言えるだろう³⁾。あくまでもいくつかのセッションに出席した私個人の印象でしかないが、どちらかという目玉となる報告が少なく、世代交代が目立った研究集会であったように思う。私が初めて見学に行った2003年リュブリャナ大会では、本や論文の題目でよく名前を見る重鎮ばかりが参加し、厳しさが伴う充実した意見交換を行う、文字通りスラブ学研究集会の頂点という印象であった。しかし15年経った今日、あの日に見たロシア語史、特に白樺文書研究で著名なアンドレイ・ザリズニャクや動詞アスペクト論の大家アレクサンドル・ボンダルコのような重鎮はもういない。ガリーナ・ゾロトワ (ロシア統語論)、ユーリー・アプレシヤン (ロシア語意味論)、エレナ・パドゥチェワ (ロシア語学)、ウラジミール・ディボー (アクセント論)、ズザンナ・トポリンスカ (スラブ語学) といった高名な研究者も、高齢が理由だろう、参加していなかった。スベトラナ・トルスタヤ (民族言語学、通時言語学)、ヤヌシュ・シャトコフスキ (スラブ方言学)、タチヤナ・ベンジーナ (スラブ方言学) といった比較的高齢の大家が積極的に報告・討論に参加していることに安堵したが、その経歴にふさわしい報告の場が与えられていないようにも思われた。その一方で、昔とは異なり、博士号を取って時間が経っていない比較的若い研究者も

3 報告スタイルも古典的な研究者は少なくない。方言学者の中には、ひたすら用例の単語や語形成のパターンを読み上げる人も相変わらずいる。また、社会言語学の基礎的な素養を持たず、自国の政治問題と言語状況を積極的に絡めるような研究者も目に付く。例えば、バルカン半島の言語接触の話で「ボスニア語」という用語を使ったために、報告内容と無関係にもかかわらず、民族主義者と思しき研究者から「そんな言語は存在しない」という話を延々と聞かされたり、コソボの南スラブ人の言葉の言語的属性について今更揉めたりする。まともなスラブ語学者なら誰でも聞いたことがあり、その場で解決が不可能な話が繰り返されるので、そういった時間は実に退屈であった。



SRC とも繋がりが深いウクライナ語研究所 Hrytsenko 氏の討論

めた研究者の集会であり、自分には永遠に場違いで、ここでは永遠に「遠くから来たお客さん」のままだと自信を無くしたのを思い出す。

文学セッションは「スラブ文学：相互影響・間文学性・間文化性」が9セッション、「スラブ文学：宗教・哲学・政治・文化：東西対話：ナショナル・イデオロギー」が7セッション、「スラブ・フォークロア・民俗学・神話」が6セッションであった。タイトルが大雑把なので、かなり異質な報告が同じセッションにまとめられているし、専門的には私にはわからないが、それでも文学のほうは、学際性への順応や新しい分野への反応が言語学よりも敏感であるように想像される。

この国際会議の特徴はいろいろあるが、今日も変わっていない点として、多言語使用が挙げられる。すべてのスラブ諸語、ドイツ語、英語、フランス語での発表が認められている。あるポーランドの重鎮研究者の話では、これはあくまでも昔に限ってうまくいった話で、スラブ人だからスラブ語がある程度わかるというだけではなく、昔の世代はスラブ語学全般に通じ、自分の話すスラブ語以外の言語の専門のおよびある程度の実用的な言語運用知識を持っていることが前提だったからだそうだ。英独仏語の知識も最低限は持ち合わせていたようである。この多言語使用は、スラブ世界に象徴的な伝統だとはいえ、専門分野が細分化された現在、特に文学・文化研究者にとっては、あまり実用的な特徴とは言えないかもしれない。今回参加したロシア文学とポーランド文学を専門とするある日本人研究者は、すべてセルビア語で行われる開会式に苦しみ、自分のセッションではマケドニア人が司会で、とにかく彼らを理解するのに困難を極めたとのことであった。これは言語研究者でさえも問題になるようで、事実私が所属する「国際スラビスト会議スラブ諸語文法構造研究部会」でも「発表言語を絞るべき」という提案があった。現在、部会事務局を務めている西スラブ諸語研究者は、「学習したことがない南スラブ諸語は、聞いたただけだと正確なところまではわからない」と言っていた。これが現実であろうし、辞書を引きながら報告を聞くこともできないから、なんとなくわかる程度、あるいはわかった気になったような内容の発表ばかり聞き続けることに、

多く参加するなど、敷居が大いに下がったようである。日本代表団関係者の一部は、今後は同じ方向に進めたいと考えているようであるが、特別に優秀な若手は例外にしても、私個人はこの流れに大いに反対である。博士号を取ったばかりの若手研究者が年長の著名な研究者と交流することは無論重要だが、それは他の学会でも可能である。余談だが、2003年リュブリャナ大会で初めて出会った上述ゾロトワ女史との会話は思い出深い。当時ロシア語統語論に取り組んでいた私は、自分の研究テーマについて女史に伺ったところ、「そのテーマは私がこれまでの著作でやり尽くした。一体どのような新しい論点とアプローチがあるというのか」と言われて面食らった。私はまだ博士課程の学生だったが、当該分野について一定以上の知識は持っていたので、正直「なんて傲慢な人だ」と思ったが、今考えると彼女には自信を持ってそう言えるだけの実績があり、そのように言う資格もある。国際スラビスト会議は、そういった道を究

どれくらい意味があるのか改めて考えさせられる。私が学生のころ年長の研究者から「スラブ諸語なんて、みんな似ていてお互い大体わかる」とよく聞かされていたが、それはやはり怪しいし、ある程度わかる（と思っている）人の勘違いかとも思う。

研究発表以外にも様々なイベントがあり、ミハイロ公通りにあるベオグラード市図書館では、過去5年間に発行された研究書や雑誌類が国ごとに展示されており、新しい刊行物の合評会が行われてい



日本出版物コーナーと参加者の小椋彩氏（東洋大学）

た。日本コーナーは他と比べて展示出版物が少ない。これがスラブ学における国際的な活力の一つの指標と考えると、言語を含めたいろいろな悪条件が日本にあるとしても、現状ではスラブ圏はもとより、西側諸国と比べても大きく後れを取っていることは事実である。ただ、日本にはロシア語・文学研究を中心としたスラブ言語文化研究者はそれなりにいるので、研究者の間で問題意識が共有されれば、現状を改善することは可能であるように思う。

今回私は予定外に二つの報告を行った。一つは予定通り、オーストリアのブルゲンラント地方で話されるクロアチア語における言語接触と言語変化の話である。ロシア語学者ダニエル・ワイス（チューリッヒ大学）、オールラウンドのダニエル・ブンチッチ（ケルン大学）、ウクライナ語学者アンドロイ・ダニレンコ（ペース大学、米国）、バルカン研究者イリーナ・セダコワ（学士院スラブ学研究所、ロシア）他から、鋭い質問が次々に出されたが、ある程度は対応できたように思う。

次の報告は、アレクサンドル・ドゥリチェンコ（タルトゥ大学）との共編でSRCからこの国際会議に記念して刊行した論集『スラブ・ミクロフィロロジー』の合評会である。会場はスラブ語慣用語論の大家ワレリー・モキエンコ（ペテルブルク大学）の部会である。本来はドゥリチェンコ氏が話すはずであったが、会議が始まる数日前に、氏から「私は病気で会議に行けなくなったから、代わりに話をしてくてほしい」という連絡を受けた。私は彼の代読だと思っていたので文書を送るように言うと「自分で好きに話せ」ということであった。これは出発2日前のことだったので大変慌てたし、事前に原稿を作ることもできなかったが、論文集の背景と特徴、今後の課題についてなどを紹介することなど最低限出来たように思う。これをきっかけにいくつかの書評が専門誌に掲載されたので、ある程度の役割は果たせたと考える。

会場は17年前に2年近く留学したベオグラード大学であった。留学当時は冷房が無いことにも、音響が悪いことにも気にせず、パワーポイントが無くとも集中して講義が聞けたが、今回は猛暑で集中力を奪われ、会場の音響の悪さや古典的なロシア・東欧の研究報告者が苦痛に感じられた。便利な世の中に慣れすぎてしまったのかもしれない。次回の大会は2023年にパリで行われる。今日のフランスのスラブ学は強いと言えないが、初の非スラブ圏での開催だけに期待は高まるし、同じ非スラブ圏である日本のスラブ学の発展にとっても参考になることが多いと考えられる。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2019年3月20日 2018年度日本スラヴ学研究会研究発表会 於東京大学本郷キャンパス
<https://www.jssll.org/>
- 3月23-24日 2018年度日本中央アジア学会年次大会 於KKR江ノ島ニュー向洋
<http://www.jacas.jp>
- 4月12-14日 BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies)
2019 Annual Conference 於ケンブリッジ大学 <http://basees.org/conferences/>
- 5月2-4日 24th Annual ASN (Association for the Study of Nationalities) World
Convention 於コロンビア大学ハリマン研究所
<http://nationalities.org/conventions/world/2019/>
- 6月22-23日 第59回比較経済体制学会全国大会 於一橋大学一橋講堂
<http://www.jaces.info/info.html>
- 6月29-30日 第10回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会 於東京大学本郷キャンパス
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/eac2019/index.html>
日本比較政治学会第22回研究大会 於筑波大学 <http://www.jacpnet.org>
- 7月4-5日 スラブ・ユーラシア研究センター 2019年度夏期国際シンポジウム
- 10月10-13日 20th Annual CESS (Central Eurasian Studies Society) Conference
於ジョージ・ワシントン大学 <https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/>
- 10月18-20日 日本国際政治学会 2019年度研究大会 於朱鷺メッセ <http://jair.or.jp>
- 11月9-10日 ロシア・東欧学会 2019年度研究大会 於慶應大学三田キャンパス
<http://www.jarees.jp>
- 11月23-26日 51st Annual ASEEEES (Association for Slavic, East European, and
Eurasian Studies) Convention 於サンフランシスコ <https://www.aseees.org/convention>
- 12月12-13日 スラブ・ユーラシア研究センター 2019年度冬期国際シンポジウム
- 2020年8月4-9日 ICCEES 第10回大会 於モンテリオール <http://iccees.org/>

[編集部]

図書室だより

◆ 『図書館と図書流通より排除すべき図書総覧』第2部 ◆ (モスクワ、全連邦書籍院, 1961年刊)

図書室では、ノヴォシビルスクの歴史家ヴラジーミル・シーシキンとの図書取引を10年以上継続し、収集チャンネルのひとつになっていますが、最近、ここを通じて次の本が入ってきました。

『図書館と図書流通より排除すべき図書総覧 Сводный список книг, подлежащих исключению из библиотек и торговой сети』第二部（モスクワ、全連邦書籍院、1961年刊）459ページ。

この資料は、序文も何の説明もなく、いきなりアルファベット順に資料が列挙されているだけのものです。シーシキンによると、第一部はトロツキーなどを収める予定だったが、刊行されずに終わったとのこと。わざわざリストを頒布するまでもないということだったのででしょうか。なお、革命前の出版物と宗教関係の著作はここにはないようです。これも改めてリスト化するまでもなく判断できるとみたのでしょう。外国の出版物は、ごく少数が入っているようです。表紙の右肩に、「リストに従って送付、23185番」（番号はゴム印）という表示があります。

実にさまざまの本がここに登場します。アントン・デニキン（1872～1947）の『ロシア動乱史 Очерки русской смуты』や、ヴラジミール・アントーノフ-オフセエンコ（1888～1938）『内戦についての覚書 Записки о гражданской войне』、イヴァーノフ＝ラズムニク（1878～1946）『革命の年 Год революции』、エヴゲニー・パシュカーニス（1891～1937）『レーニンの遺産から Из ленинского наследства』、同『帝国主義と植民政策 Империализм и колониальная политика』第1部、イサーク・バーベリ（1894～1940）『短編集 Рассказы』、同『騎兵隊 Конармия』、ボリス・パステルナーク（1890～1960）『第二誕生 Второе рождение』等々。

詳しく調べたわけではありませんが、どうしてこの本が選択されたのか、よくわからないものもあります。たとえば、マクシム・ゴーリキー（1868～1936）の著作はリストにひとつもありませんが、彼について書かれたものはいろいろ挙げられています。レーニン関係の著作も同様です。

ソヴィエト政権初期の教育人民委員だったアナトーリー・ルナチャルスキー（1875～1933）、モンゴル学者ニコライ・ポッペ（1897～1991）の本は、多数が禁書とされています。その一方で、哲学者のセルゲイ・ブルガーコフ（1871～1944）や作家ミハイル・ブルガーコフ（1891～1940）、アンドレイ・プラトーノフ（1899～1951）の著作はありません。

ともあれこの本は、1960年ごろのソ連において、図書館と図書流通の統制がどのようなものだったかを知る材料として、非常に興味深いものです。[兔内]

◆ 『窓』（ナウカ）の総目次データ作成 ◆

近年、センター図書室は関連雑誌の総目次データ作成をいくつかかけていますが、このほど『窓』（1～133号、1972～2005年）の総目次データ2,033件をエクセルの表で作成しましたので、お知らせします。

作業を進める中では、芸術、文学、歴史、民俗、政治、経済、教育など戦後のロシア・東欧研究の広い方面で、第一線で活躍された多くの方が、興味深いエッセイや論考を多く寄せていることを改めて認識させられ、この雑誌の意義を再確認できたように思います。

このファイルは、これまで総目次データを作成した雑誌と同様、皓星社に提供し「ごっさくプラス」に収録されておりますほか、図書室宛てご連絡いただければ頒布します。[兔内]

編集室だより

◆ 『スラヴ研究』 ◆

第66号（今年6月刊行予定）には、12本の投稿がありました。現在、査読結果を踏まえた修正稿が上がってきており、編集委員会で検討しているところです。[長縄]

会議 (2018年11月～2019年1月)

◆ センター協議員会 ◆

2018年度第5回 11月1日(木)
議題 1. 教員の人事について

2018年度第6回 11月21日(水)
議題 1. 次期センター長の選出について
2. 部局間交流協定の締結について

2018年度第7回 12月5日(水)
議題 1. 教員の人事について

2018年度第8回 1月16日(水)
議題 1. 教員の人事について

2018年度第9回 1月24日(木)
議題 1. 教員の人事について
2. 客員研究員の採用及び称号付与について
3. 非常勤講師の採用について

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2018年度第2回 12月15日(土)
議題 1. センター共同研究員の選考について

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2018年度第1回 12月15日(土)
議題 1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について [事務係]

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース155号以降のセンター訪問者(客員、道央圏を除く)は以下の通りです(敬称略)。
[仙石/大須賀]

- 11月11日 斎藤正良(写真家)
- 11月12日 Gerhard Neweklowsky(ウイーン大、オーストリア)、野口健太(株式会社事業革新パートナーズ、リーダー、2011年度修士卒業生)
- 11月16日 上垣彰(西南学院大)
- 11月30日 宗野ふもと(筑波大)
- 12月3日 藤澤潤(神戸大)
- 12月8日 アレクサンダー・デビッド・キング(フランクリン&マーシャル大)、日臺健雄(和光大)
- 12月13-14日 Neil Bermel(シェフィールド大、UK)、Jan Ivar Bjørnflaten(オスロ大)、Elena Boudovskaia(ジョージタウン大学、米国)、Romuald Huszcza(ワルシャワ大学)、Tomasz Kamusella(セ

- ントアンドリュース大、UK)、Snježana Kordić (Independent Scholar)、Joep Leerssen (阿姆斯特ダム大)、Michael Moser (ウィーン大学)、Aleksandra Salamurović (イェーナ大、ドイツ)、Annemarie Sorescu-Marinković (バルカン研究機構)、荒井幸康、岩崎一郎 (一橋大)、中山大将 (京都大)、櫻間瑞希 (筑波大) 貞包和寛 (東京外国語大)、長興進 (早稲田大)、三谷恵子 (東京大)、ダツェンコ・イーホル (中京大)、マリヤ・プピナ (言語学研究所、ロシア)、Eleonora Yovkova-Shii (富山大)
- 12月15日 窪田順平 (人間文化研究機構)、河野泰之 (京都大)、黒木英充 (東京外国語大)、志田仁完 (環日本海経済研究所)、豊川浩一 (明治大)、中村唯史 (京都大)、道上真有 (新潟大) 湯浅剛 (広島市立大)
- 12月17日 ティムール・ダダバエフ (筑波大)
- 12月25日 徳永昌弘 (関西大)
- 1月8日 クリスチャン・フェイゲルソン (パリ第三大)
- 1月15日 森下丈二 (東京海洋大)
- 1月16日 松里公孝 (東京大)
- 1月20日 伊藤庄一 (日本エネルギー経済研究所)
- 1月21日 齊藤茂雄 (早稲田大)
- 1月22日 徳永昌弘
- 1月28日 Aleksandra Jarosz (ニコラウス・コペルニクス大、ポーランド)、半谷史郎 (愛知県立大)
- 1月30日 大西秀之 (同志社女子大)
- 1月31日 八木君人 (早稲田大)
- 2月1日 天野尚樹 (山形大)
- 2月4日 小森宏美 (早稲田大)
- 2月5日 熊倉潤 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- 2月8日 本多俊和
- 2月8日 浜由樹子 (一橋大)
- 2月10日 アレキサンダー・デビッド・キング (フランクリン&マーシャル大)
- 2月11日 封安全 (黒龍江省社会科学院)、馬友君 (同)、張鳳林 (同)、殷勇 (同)、マリヤ・プピナ (言語学研究所、ロシア)、ナターリア・トゥチコワ (トムスク国立教育大、ロシア)
- 2月12日 志田仁完 (環日本海経済研究所)、浜由樹子 (一橋大)
- 2月13日 新井洋史 (環日本海経済研究所)、道上真有 (新潟大)、菅沼桂子 (日本大)、カン・ビクトリヤ (帝京大)
- 2月14日 秋山徹 (早稲田大)、小野智香子 (千葉大)
- 2月15日 荻原眞子 (千葉大)
- 2月17日 吉村貴之 (早稲田大)
- 2月21日 塩谷哲史 (筑波大)、藤本健太郎 (日本学術振興会特別研究員)
- 2月22日 矢嶋光 (名城大)

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は12月5～11日の間、“50th Annual ASEEEES Convention” 出席・研究報告・意見交換のため、アメリカに出張。12月16～20日の間、インド経済の発展モデルに関する調査・意見交換のためインドに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は12月6～25日の間、“50th Annual ASEEEES Convention” 出席・研究報告・意見交換、また資料収集のため、アメリカに出張。

岩下明裕研究員は11月18～20日の間、「北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター招請コロキウム」への参加・講演のため、韓国に出張。12月20～24日の間、現地調査、視察のため、シンガポール、マレーシア、インドネシアに出張。

野野素己研究員は11月1～7日の間、研究報告(ドイツ)、招待講演(チェコ)のため、ドイツ、チェコに出張。

長縄宣博研究員は12月5～11日の間、“50th Annual ASEEEES Convention” 出席・研究報告・研究打合せのため、アメリカに出張。

宇山智彦研究員は11月11～15日の間、国際ワークショップ *Conflicting Concepts: Linguistics Ideologies and Geopolitics in Pan-National Movements in Eurasia* 出席・報告のため、フィンランドに出張。11月18～24日の間、タジキスタンと諸大国の関係、および同国の内政と外政の関係についての調査のため、タジキスタンに出張。

宍内勇津流研究員は12月17～24日の間、近世・近代日本北方関係史料の調査および現地研究者と研究打合せのため、ロシア、エストニア、フィンランドに出張。 [事務係]

目 次

研究の最前線.....	1
スラブ・ユーラシア研究センター 2018 年度冬期国際シンポジウム「帝国・ブロック・連邦にそびえる言語 1918-2018」開催／人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」／北東アジア学会連携シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」開催／2019 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧を中心とした総合的研究）にかんする公募結果／専任・非常勤研究員セミナー／黒竜江省社会科学院の研究者の滞在／研究会活動	
中央アジア映画上映会について.....	12
by ビタバロヴァ・アセリ	
二つの季節より長い時間.....	16
by グルナラ・アビケエヴァ	
第 16 回ベオグラード国際スラビスト会議に参加して.....	22
by 野町素己	
学界短信.....	26
学会カレンダー	
図書室だより.....	26
『図書館と図書流通より排除すべき図書総覧』第 2 部（モスクワ、全連邦書籍院，1961 年刊）／『窓』（ナウカ）の総目次データ作成	
編集室だより.....	27
『スラヴ研究』	
会議.....	28
センター協議委員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会	
みせらねあ.....	28
人物往来／研究員消息	

2019 年 3 月 25 日発行

編集	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
